

「あの時分」―追憶断片―

(二)

足立子

三〇

ある囚人は牢獄生活の寂寞に耐へずして、己れの掌を握つめて慰めたといふ事が書物に記されてあつた。私はその心持を非常にゆかしく思ふ。

大盛疾呼、國家を論じ社會を諷する事は、私にはとても出来さうもない。私には矢張り私の領域がある。それは爐邊の物語や茶前茶後の断片にか過ぎぬが、それも是非もない。自分の筆を凝視するやうな心持ちで、ペンを採つた。それは私にとりて寂しくも又楽しい事だ。

吉田先生！ といへば郡内の教員では誰一人知らぬ者はない。K町の人達は旦那達は勿論裏通の長屋の翁さん媪さんでも、吉田先生といへば直ちにうなづく。四辻の大でさへ、吉田先生を見ては尾を振つて寄附くといふ事だ。

釋して居た。

先生は何よりも酒が一番好きだつた。それも一升二升を飲み干すといふ酒豪ではない。ちびりちびり、朝でよし晝でよし、暇さへあれば何時でもかまはぬ、又學校であらうと、何處であらうと、一向頓着せぬ極めて無邪氣な酒呑翁であつた。

學校へ出勤する時には、もう何處かで一杯傾けて来る。退校の時も歸宅する迄には又何處かで酒中の仙となられて居る。冬になると教卓の下から徳利が出て来ると口善惡ない童が噂して居た。それでも誰一人先生を批難する人は居ない。父兄達も先生の酔顔には朝夕見なれて居る。全く先生の飲酒は天下御免であつた。

酔ふと昔の物語りだ。

それも決して無理ではない。K小學校に勤続すること四十餘年、縣下としても餘り例がない位だもの。父と子と孫と三代續いて、先生の薫陶をうけたといふものもK町には珍しくない。

職員會議の席で、兒童の性行などの談が出る時、あの子の父がどうした。母は凭であつた。祖父様はこんな事があつたと、古い昔話から説き出すのが常だ。

私が赴任された時には、既に六十の坂を越えて居た。瘦瘠として壯者を凌ぐ健康よりを致いかめしき大髯の髪、腰に大刀をればさみ、ブツサキ羽織に道中袴、大道袂しと闊歩せし當時の青年武士の姿が、醉眼に髣髴として現るゝのであつた。

「日本橋通りを通る時でした。酒に酔ふた悪漢二名が、突然現はれ、その中の一人が、ツカ〜と私の側へ寄つて私の胸倉を押へた。何をツ〜と得意の柔術で逆手を食はすと、これはたまらぬと思つたか、二人共一目散に逃げてしまつたのです。……呵々」

その時は先生が得意の絶頂にある時でした。「品川の御臺場に勤めて居ましたよ。佛蘭西式の教練を習ひましてね……」

といひ乍ら、佛蘭西式の號令を初めるのが癖であつた。

先生は武州忍藩の士族であつたが、明治維新

三一